魔人筆頭ホーネット。
魔王の娘であり、町を完全に焦土にできるほどの絶大な魔力を持つ彼女は、今まさにその美しい処女の肉体を、宿敵ケイブリスに犯されようとしていた。
自らの使徒や部下の兵士達を凌辱し、惨殺した仇が、その巨大な肉体を余す所なく使ってこれから自分を嬲り者にする。
悔しさに歯噛みしつつも、敗北者である自分はそれを受け入れるしかない。
今もなお自分の救出のために戦っているであろう仲間の魔人達は無事でいるだろうか。
「犯すなら早くしなさい…」

「覚悟ができてるってツラだけどよ、処女のお嬢様のお前がこんなのブチ入れられて本当に平気なのかぁ？」

目の前に異形の触手が突き出され、その鼻をつく異臭にホーネットは顔をしかめる。

（……気持ち悪い……あんなもので、今から私……）

ホーネットは厳しい戦いの訓練はされてきたものの、基本的にはお嬢様育ちで、男を全く知らない処女だ。そんな彼女にとって初めて受け入れるものがここまえ不恰好で臭く、なおかつ巨大な肉柱ということは正直耐え難い。だが、唇をきゅっと噛み、気丈に言い放つ。

「私は……恐れはしません……」

「いい覚悟じゃねえか、それでこそ魔人筆頭のお姫様だぜ！」
「あっ……」
ケイブリスが4本の腕の小さいほうの一対を使ってホーネットの豊かな乳房をもみしだく。
「ふにふにしてやがる、もみ心地のいいおっぱいだぜ」
「あ、やめなさい、うっ……」
あまりにも敏感なその大きな双乳はケイブリスの愛撫にしっかりと反応しはじめ、そのうちに魔人の姫は自分の体がオスを受け入れる準備を完了した事に嫌悪感とともに気が付いた。
（……私……感じて……）

「挿入れるぜぇっ！」
「ふっう……!!」
ケイブリスの触手が、わずかに濡れていた処女の肉穴に、めりめりとめり込んできた。
「うっ……ううっ……！」
悲鳴を噛み殺すホーネット。
「ああ……極上のマ○コだ……脳みそまでしびれそうだぜ……」

「どうだ、奥まで俺の触手が入った
感触はよぉ……しっかり繋がってずっぷり入って
大切に守ってきた処女膜も跡形もねえなあ……!!」

「くっ……うぅぅ……っ!!」

ホーネットは必死に痛みをこらえ、
声をあげまいとする。

悲しんだり苦しんだりのそぶりを見せれば
その分だけケイブリスが喜ぶからだ。

だが、表に出さないだけで、心の内は
喪失感と屈辱感があふれんばかりになっていた。

こんな……こんな怪物に犯されて、初めてを……

ケイブリスはその屈辱を見透かして、
ニヤニヤと笑っている。

「いくぜぇぇぇっ!!おらぁぁっ!!」
「はうっ……っ、ぐっ……、ぐふあっ!!」
巨大なほうの二本の腕でホーネットの両足を掴み、
物凄い勢いでピストン運動を始める
ケイブリス。
破瓜の痛みに痺れていた秘所の襞を
この上なく乱暴に触手にこすり上げられ、
苦痛にうめくホーネット。
処女の証たる鮮血が細い筋を作って
触手を伝い流れている。

「うぉぉ、出すぞ、ホーネット!!
魔人筆頭の膣に、中出しだぁっ!!」
「は、はうっ……い、嫌ぁぁっ!!」
どぶっ、どぶぅぅっ……!
おぞましい量の熱い粘液が、ホーネットの
清らかな膣内に流れ込む。
熱く、どろどろとしていて、
まさに魔獣の精液が自分の体に注がれるのを、
ホーネットははっきりと感じている。

「は、はぁっ……なに……？これは……」
今まで全く感じたことのない不快な圧迫感と、
腹部の膨満感。
体格を考えれば全く不思議な
ことではないが、
ケイブリスの射精量が
あまりにも多すぎ、
ホーネットの腹部を内側から
大きく膨らませているのだ。
「腹の中まで俺の白いのでぎっちぎちになった
気分はどうだよ、ホーネット。苦しいか？」
ホーネットは自分の体が
ケイブリスの精液袋として
作りかえられたようなショックに、
言葉を発することもできない。
「わかったか、お前は今日から
俺のオナホールだ。しっかり俺を気持ちよくさせるんだぞ」
「い、嫌……嫌よそんなの……」
茫然としたまま首を左右に振るホーネット。

ひとしきり射精が終わると、
ケイブリスは思い切り触手を
ホーネットの膣から引き抜いた。
「うあぁぁぁっ!!」
刺激に思わず声を出すホーネット。
腹圧に押された白濁液が一斉に噴出し、
白いアーチを宙に描く光景を、
凍りついたように目を見開いて
魔人の姫は見つめていた。

地下牢に監禁されたホーネットは、
ケイブリスに嬲りものにされる日々が続いていた。
初日の射精からしてそうだが、
ただの人間の女ならあれで内臓を破壊されて
即死してしまう。
そう簡単には壊れない美しい女魔人は、
ケイブリスにとって理想の性玩具だった。

「う、や、やめ……」
ケイブリスの無数の触手が
ホーネットの全身に絡みつく。
豊かな胸の谷間に挟まってパイズリの体勢になる。
半透明な細い触腕で乳首やクリトリスを刺激する。
ありとあらゆる方法で全身を嬲られ、
否が応でも肉体が反応し始める。

「さて、そろそろ入れるぜっ!!」
「う、うぅぅっ……!!」
無慈悲に巨大な触手が
前後の穴に同時に入れられる。
これで後ろの処女も失ったことになる。
使徒が目の前で全部の穴を犯されて
殺されるのを見るまで、
性知識に乏しいホーネットは
そこに何かを入れるなど
考え付きすらしなかったため、
屈辱と羞恥はもはや極限と言っていいレベルだ。
「魔人筆頭はアナルの締まりも最高だな、
日々の鍛錬で鍛えてたからかぁ?」
「や、やめなさい、そんな事あるわけが……!」

「だったらなんでこんなになってんだ、ばっちりくわえ込んでるじゃねえかよ、ガハハハ!!」
「う、うぅ……許さ、ない……」
ホーネットは目にうっすら涙を浮かべて悔しがる。
凌辱されながらの反論ほど空しいものもない。
動きは激しさを次第に増し、
ホーネットは全身をのけぞらせ、長く美しい髪を
振り乱しながら辱められ続ける。

「受け止めろっ、ホーネット、俺の熱いのをよっ!!」
「い、いやっ……」
ごぽっ……
ケイブリスの触手が激しく動き、ホーネットの両穴に粘液を噴出した。
（後ろにも出された……どんどん入ってくる……）
あまりの不快感に反射的にその場から逃げ出そうともがくが、拘束された状態で動くほど触手が体内で深く擦れる。

その刺激に呼応するように、
全身を囲んでいた触手たちが
いっせいに粘液を噴射する。
ホーネットの可憐な顔も、緑に輝く髪も、
豊かな乳房も、
全てが白く汚されていく。
腸と膣に注がれ続ける精液は、またも
彼女の腹を不恰好に膨らませていた。

何十回、何百回犯されただろうか。
激しい触手レイプの果てに、ホーネットの全身は
粘液で真っ白になっていた。
かふ、とケイブリスの出した液で泡をつくりつつ
軽く咳き込む。
鈍器として振り下ろされる触手の打撃で
全身には無数のアザができ、
最早意識は朦朧としている。
その目は虚ろで、何も見ていないように見える。

どうにか体を再生させ、生き延びたホーネット。
力をほぼ失った彼女に与えられたのは、
魔軍の性奴隷としての仕事だった。
「あのホーネット様と交尾できるなんて、
オラ幸せダァ」
全身に赤黒い腫瘍のようなものが付いている
パワーゴリラ系の部隊の順番が来ている。
前の穴も後ろの穴も口も、
２４時間３６５日フル稼動の休み無しの
精液便所。
目で見ることすら許されなかった、
高貴な魔人の姫君、先代魔王の娘に
膣内射精や肛内射精、顔射も精飲も
させ放題なのだ。
呼吸する回数よりレイプされる回数のほうが
多いのでは、と思えるほどに、
ホーネットはおぞましいほどの輪姦を受けていた。

「ウホッ……ホーネット様の膣内にザーメン出るウホッ!!」
「あっ……」
パワーゴリラが可憐な姫君の膣に無遠慮に種付けを完了すると同時に、かなり小型のいもむしがそのアナルに異形の性器を挿し入れる。
(こんな物にまで、犯されてる…)
ホーネットは考えもしなかった相手と交尾するごとに、もう自分が精液を出すための道具なのだと自覚させられる。

「ホーネット様ぁっ！ザーメンとまらねえウホッ!!」
何回も繋がったまま膣に射精され、
結合部から滝のようにパワーゴリラの精液があふれ出る。
そしてアナルではいもむしが本当に気持ちが悪い
機械的な痙攣をしつつ、魔人の姫の尻に
ムシの精液を流し込んだ。
「あうっ……やぁっ……!!」

「はぁ、はぁっ……んっ……」
硬めのザーメンが、膣内でさらに射精し続けるパワーゴリラの巨大ペニスに押されるようにして、アナルから外に飛び散る。
列になって自分の番を待つ次の「利用者」達がその凄艶な様を凝視している。
視線をはっきりと感じ、ホーネットは羞恥に顔を赤くしている。

牢屋のなかで犯され続けているホーネット。
もう何日経ったか、何万回犯されたかはわからない。
多いときは一時間に１５体ほど相手をし、
全穴合計で１００回くらい射精される。

それが２４時間で２４００回、
一月で７万二千回
もう半年くらいは起っているから
４０万回以上犯されたことになる。
この世界で一番多く犯された女は
多分自分だろう。

そんな事を考えつつも、
高い再生能力によって衰えることのない
美貌と美しい肢体で、
今日も魔物達を喜ばせ続ける。

この頃になると心がかなり折れてきて、
魔物の要求にも応じるようになっていた。
犯された体験の量がそれ以外の
記憶に大して大きくなりすぎ、
最早自分がどんな存在で何のために
生きていたか等の事柄が
押し流されつつあったからだ。

「ホーネット様はオデのドリルチンポが
好きなんだよなぁ？」
「は、はい、ぶたばんばら様の
おちんちん、好きです……」
ぎこちなく尻肉を広げ、
おずおずと誘うような動きをする
ホーネット。
もう魔軍のほぼ全員が
彼女の穴を味わっているが、
前の順番の時より
はっきりと可愛げが
増しているのがまた好評だ。
まだ完全に屈服しているわけで
はないのもまた良い具合だ。
「俺のチンコだって大好きだろ？
ホーネットよぉ」
「は、はい、冷たくて、ぬるぬるして、
気持ち、いいです……」

「あ、あひっ……！」
ぶたばんばらがホーネットの
アナルにドリル型の性器を
ねじ込むように入れると、
すらりとした体を思い切り反らせて
ホーネットは喘ぐ。
狭い入り口がペニスを扱き上げる
感触を楽しみながら、
二体の魔物は息のあった動きで
ホーネットの両穴を
がっつりと犯している。
「あ、あっあっ……」

「だ、だめぇっ、もう、イクっ……！」
「おーやった、イッたブヒホーネット様」
「こりゃ今度の戦、勝ったな」

全身を激しく痙攣させて、
ホーネットは絶頂した。
寝ても醒めても延々レイプされてるために
常に少しずつイキ続けているような
この女魔人がはっきりとイクのは
かなり珍しく、おみくじの大吉のような
扱いになっていた。

「しっかしホーネット様はこんななっても
すげえ可愛いブヒ」
「乳もでけえしケツもエロイし
最高すぎるよなあ」

下からおっぱいを舐め上げながら、
半魚人系の魔物が囁う。
今や魔軍全員が
ホーネットの愛用者になっている。

ホーネットの口にさらにもう一体の
ぶたばんばらが
無理やりペニスをねじ込む。

苦しがろうがお構い無しに、
喉の奥までをドリル型のそれで
抉り抜く。

「ん、んむぅっ…!!」
「お、すげえ締まりが良くなってきたブヒ」
「ホーネットちゃんは本当に3穴が好きだなぁ、
よしスパートいくぜっ!!!」

魔物達は抜群のコンビネーションで
ホーネットの穴全てに激しく
ペニスを打ち込み続け、
どんどん速さを増していく。

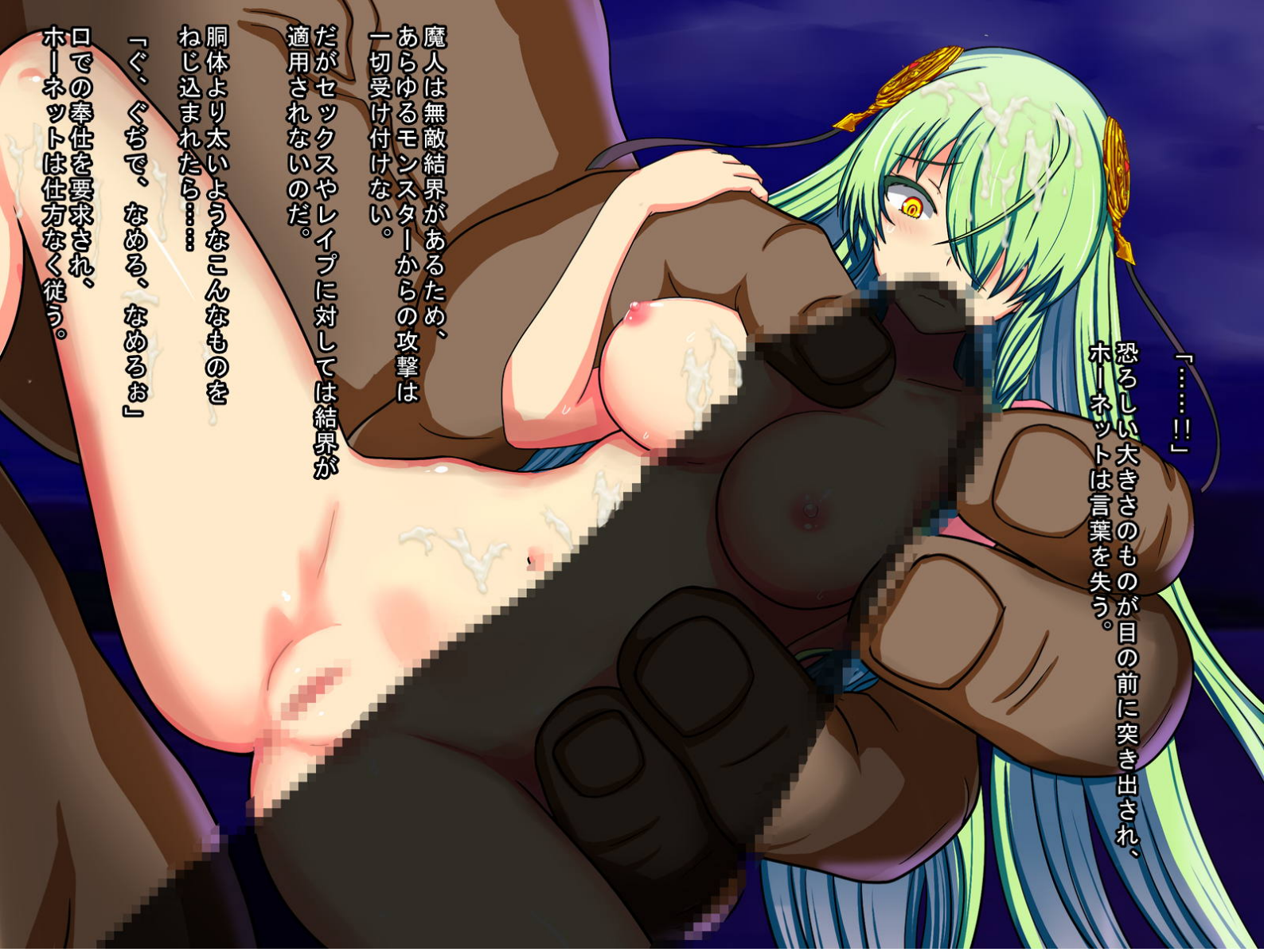
「いくぅぅっ!!」
「出るブヒッ!!」
「オラもぉっ!!」
「んんんっ!!」
一人と3体が同時に叫び声を上げながら、盛大に絶頂した。
ホーネットの膣とアナルはペニスを搾り取るように断続的に収縮し、後から後から喉に注がれる精液を一滴もこぼすまいと飲み込んでいる。

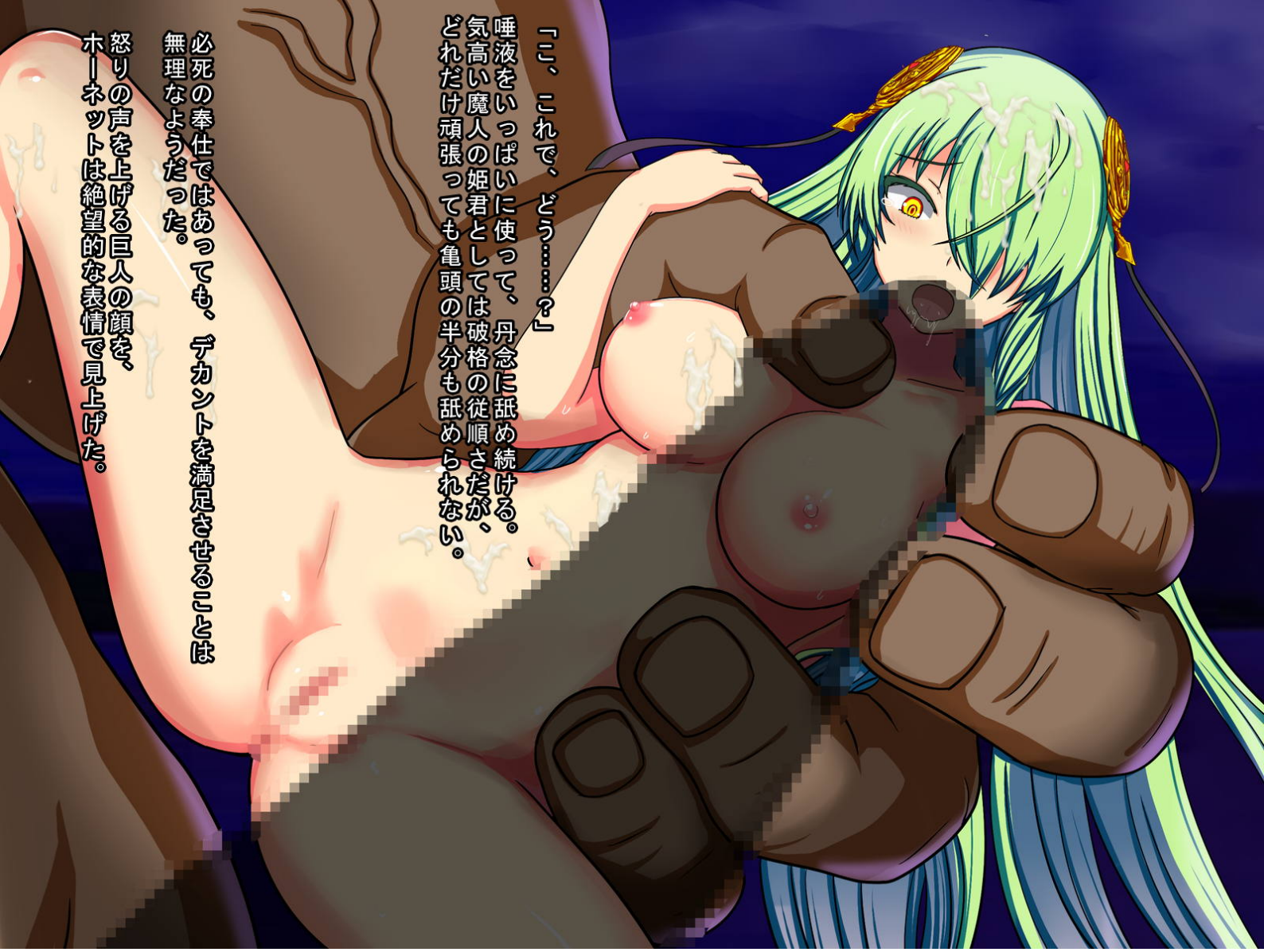
「あーイッタイッタ……魔人筆頭なんかやるより
肉便器のほうが才能あるべ　ホーネット様」
「今日はあと２００体か、もっと犯りたかったブヒ」
体の内も外も、
全身を白く染められたホーネット。
そろそろ外で家畜用のホースで
しっかりと洗われる頃合だ。

武勲をあげればホーネットを
優先的に使えるチケットがもらえるため、
魔軍の士気向上にも役立っている。

かつての魔人筆頭、世界最強クラスの
戦闘力を持っていた姫君は、
いまや理想的な性奴家畜として完成しつつあった。

「は、放して……!!」
「グルガァァァ!!」
5メートルはあろうかという愚鈍な巨人、デカント。
何体いようが万全な状態ならホーネットの
六色破壊光線の敵ではないが、
度重なる休み無しの凌辱で、魔力も体力も
極限に消耗している今の彼女にとっては
何よりも恐ろしい相手だった。
軽々と巨大な手でその体を握られ、
抵抗を封じられてしまう。


「……!!」
恐ろしい大きさのものが目の前に突き出され、
ホーネットは言葉を失う。
魔人は無敵結界があるため、
あらゆるモンスターからの攻撃は
一切受け付けない。
だがセックスやレイプに対しては結界が
適用されないのだ。
胴体より太いようなこんなものを
ねじ込まれたら……
「ぐ、ぐぢで、なめる、なめるぉ」
口での奉仕を要求され、
ホーネットは仕方なく従う。


「こ、これで、どう……？」
唾液をいっぱいに使って、丹念に舐め続ける。
気高い魔人の姫君としては破格の従順さだが、
どれだけ頑張っても亀頭の半分も舐められない。
必死の奉仕ではあっても、デカントを満足させることは
無理なようだった。
怒りの声を上げる巨人の顔を、
ホーネットは絶望的な表情で見上げた。

「い、嫌ぁぁ…!!」
女魔人の細い腰を
上回る太さの巨大なものが、
無毛の秘所に強烈な力で押し当てられる。
本来なら絶対入らないし、
無理にやっても死ぬだけだ。
だが、自分に限っては……
こんなものとも交われるのだ。
死ぬほどの苦痛を伴って。
頭を振り、巨大な指を引っかき、
足をばたつかせ、
噛み付いてまでして
抵抗するホーネット。
だが、非情な巨大ペニスは止まらない。
めりめり、めぎめぎと音を立てて、
ホーネットの体を広げていく。

ズンッ！！！
体の内部構造全てを巨人のペニス用に作り変える勢いで、
あまりにも大きな男性器が
ホーネットにぶち込まれた。
「か、かはっ……、かひゅっ……!!」
圧力のッ素尼時差に喘ぐホーネット。
何千何万の凌辱と調教の成果か、
それとも再生能力の賜物か。
その股間は血を流すことなく、
しっかりとデカントのペニスを
くわえ込んでいる。
「ぐっ……ぐあぁぁぁっ……!!」

カウパー液だけで普通の魔物の
精液の何百倍もの量がある。
それを潤滑液として使いながら、
ホーネットを握り締めてペニスをしごくデカント。
「ガ、ガァァァ、ギモヂ、イイッ」
「や、やめ、て、うご、かさ、ないで……」
残像すら見えるほどの速さで
肉の柱が体内を往復し、
妊婦のように膨らんだ腹が
めきめきと伸縮する。
内側から広げられる体を巨人の手が外から
圧死するほどの強さで握り締める。

女体の全てを道具として使った、超巨根レイプ。
それをデカントは本来自分よりはるかに強い
ホーネットに食らわせている。
下克上の喜びが性感を引き上げ、巨人は
ヨダレを垂らしながら猛烈に犯し続ける。
死ねないのが辛い、そう感じるほどの
凄惨な凌辱だ。
「ぎ、ぎひぃいっ……」
「デ、デル、ホーネットニナカダシッ!!」
「やめてぇぇぇっ!!」

「ヴォォォォオオオッ!!!!」
「あふあぁぁぁっ!!!」
噴水というよりは、もはや滝だった。
ホーネットの体内で生まれた
熱い精液の滝が、
膣襞も子宮も全て吹き飛ばさんほどに
激しく荒れ狂い、
水圧で何度もホーネットを
気絶させた。
魔人の姫は苦痛なのか快感なのか
もはや全くわからない、
強烈な感覚の嵐に精神を砕かれ、
強く奥歯をかみ締めながら
精流を受け止めている。
涙をぽろぽろとこぼすその顔は
こんな時でさえ美しい。

地面に使い捨てられたコンドームのように
投げ捨てられたホーネット。

それを次のデカントが水でよく洗い、
事もなげに自分のペニスに「装着」して使用する。

デカントは１０体ほどいたが、
最後の一体が後ろに入れた時は、
ほぼ失神していたホーネットが流石に目を覚まし、
恐ろしい絶叫を上げていた。

だが、そのうちに尻から注がれた何ガロンもの精液で
下から喉をふさがれ、声は止まった。

ホーネットは今日もまた拘束され、
オスを受け入れさせられている。
その美しい体はデカントに輪姦されても
傷も残らず、
決して衰えることがない。
無限に犯すことができる神からの贈り物のようだ。

「おいおい、こんなに入るとか
ガバガバすぎんだろ」
「そう思うだろ？でも何でも入るけど
すげえ気持ちいいんだよホー様のマ〇コ」
「ケツとか3本同時とかハンパねえな……」
長いペニスを持つ魔物が6体、魔人筆頭の体内に
いっぺんに性器を挿入する。
前に太いのが2本、細いのが1本、
後ろにそれぞれ構造が違うペニスが3本。
乳に腰掛けるようにして小型の魔物が口を犯し、
尿道にまでムシが細いペニスを挿し入れる。
同時に8体に犯される倒錯的な行為も、
魔人の姫は受け入れる。
「うぉぉ、何だこりゃぁ……締め付けが
どんな女より気持ちいいぜ……っ」
「流石みんなの精液便所アイドルだぜっ…!!」

「おいおい、こんなに入るとか
ガバガバすぎんだろ」
「うっ、んあっ……」
前と後ろの穴で自在に動く様々な魔物のペニス。
そして滅多にいじられない尿道への蟲レイプ。
不本意にも開発されきっている女魔人の肉体は、
あまりにも敏感に反応してしまう。
「おいおい姫様感じてるぜ、マジかよ」
「さぼるんじゃねえ！このマ〇コ穴があっ！！」
口での奉仕がおろそかなことに文句を言われ、
髪をぐいぐい引っ張られながら
顔に小さい魔物の腰を叩きつけられつつ
イラマチオをする。

「んふぅっ……！」
口とアナルで精液が弾け散る。
温度、粘度、そして質感や噴出する勢い。
ペニスの感触と同様、魔物の種によって全く違う。
それが体の奥で混ざりあって、
ホーネットに何とも言えない快楽を与えてくれる。
絶頂を感じ、精液を飲み干しながら
強く両穴を締め付けるホーネット。

「射精るっ……魔人筆頭に、膣内射精っ……!!」
前の穴と尿道でも、大量の射精が始まった。
膀胱の中までも犯され、ホーネットはボンヤリとしながらもその感触をしっかり味わっている。

「最高だぜホーネットちゃん……」
「ホー様のマ○コパネェ……」
「ホント憧れの人がセックス奴隷とか最高だわ……」
自分を犯してる魔物達はとても嬉しそうだ。
ムシまでもが自分で気持ちよくなってくれている。
精液まみれの顔で、自分でも気付かぬまま
ホーネットは可愛く微笑んでいた。
監禁され、寝る時間すらなくレイプされ続けている、
犯される以外の時間が完全にゼロのホーネット。
彼女はいつしか自分が今唯一できること――
レイプしてくる相手を喜ばせられる事に
存在理由を見出しつつあった。

大軍を集めての衆人環視凌辱。
女魔人メディウサがホーネットの膣に自分の体の一部である
白い蛇を埋め込み、
体内で暴れまわらせている。
妊婦のそれともまた違う、内臓や筋肉を滅茶苦茶にしている
腹の中でのうねりがはっきりとわかるおぞましい膨らみ。
見ている魔物達のなかにも流石に引いている者が多少いる。
「あ、いや、あぐあぁあっ!!」
悲鳴を上げながら悶えまわるホーネット。
「死ねないって本当に大変よねえ、
流石に再生が追いつかないのかここもこんなに変色して
ドス黒くなっちゃってさぁ」
「は、はあ、はぁ……」
「休んでちゃダメよ!?」
さらに激しくなる白蛇の動き。
「がぎゃぁあっ……!!」

「あら、こんなんでイキそうになってる、ホーネットはしょうがないなあ……イッちゃいなさい」

「あ、あふ、あはぁぁっ……!!」

ホーネットは盛大に潮を吹き、ぐったりと脱力した。

群集にざわめきが広がる。いくら何万回も犯されてるとは言っても
メディウサの拷問でイキまくった女は
ホーネットが初めてだろう。
魔人筆頭がここまで堕ちたか、
という嘲笑の声がかけられる。

「ふー、ふぅぅっ……」

ホーネットはそんな罵声も聞こえない体で、
まだ断続的な痙攣を続けている。

「あーあ、こんなに濡らして……
ダメでエッチなホーネットちゃんにね、
今日はプレゼントがあるんだ」

「このビンの中身は何でしょう？答えはね、
何でも孕んで産んじゃう
聖女モンスターの血です。」

「え……？」

「女魔人は不妊ってのは知ってたけどさ、
１００万回犯されてもアンタ
孕む気配なさそうじゃん？
魔力が強すぎるせいかもしれないけれど」

事情が飲み込めないホーネットは
ただ困惑しながら話を聞いている。

「むかつくのよねえ。私どんだけ
犯されても、女として最後の誇りまで
汚されてませんって感じでさ。
だからこれで孕むように改造してあげる。」

「や……やめて……そんな……」

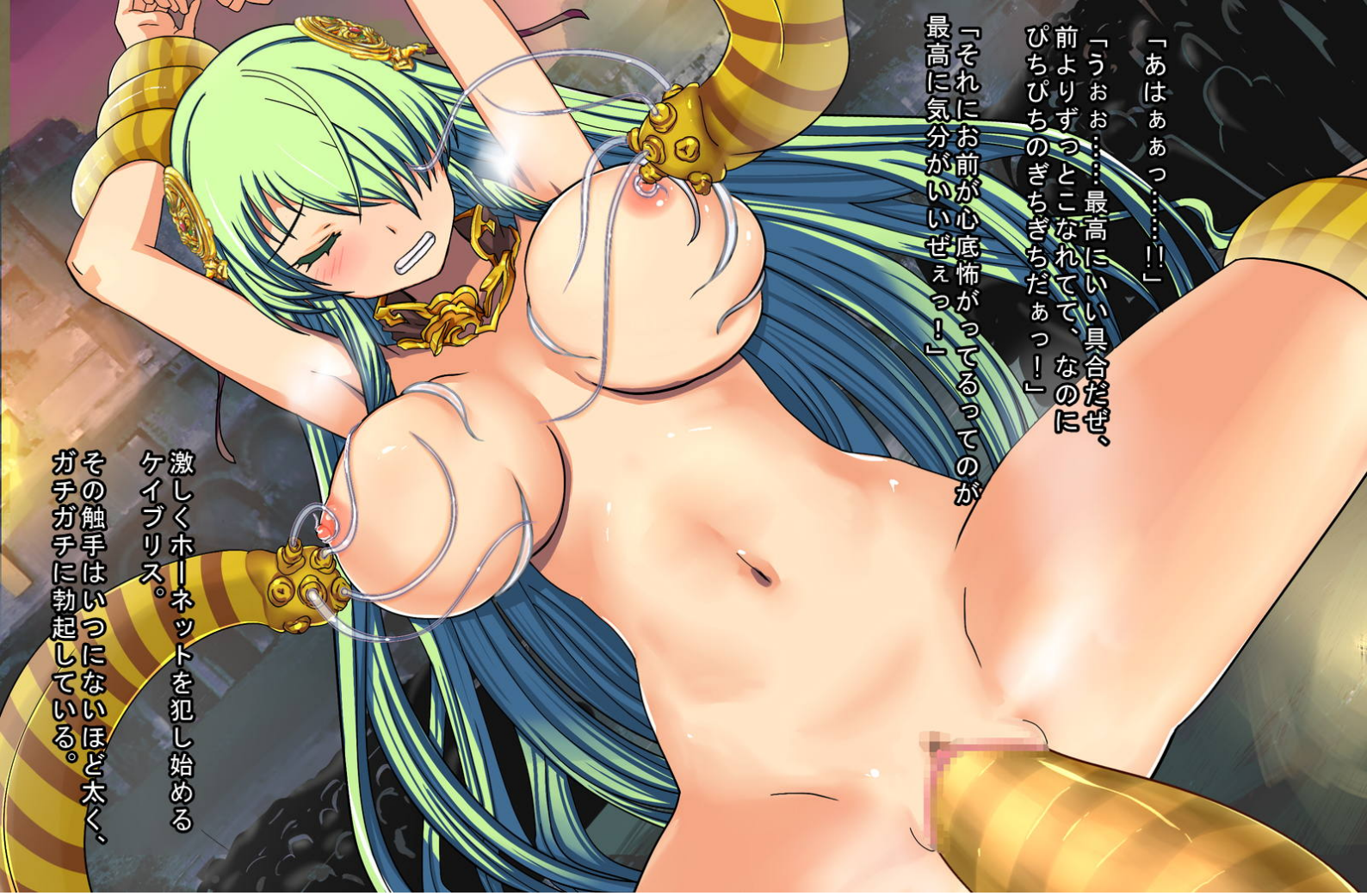
女魔人は極めて妊娠しにくい体だ。
ホーネットは特にその傾向が強く、
妊娠の恐怖を意識したことはなかった。

しかしまさかこんな手段で……
生まれて初めて感じる妊娠の恐怖に、
ホーネットは激しく狼狽する。

その様をじっくり楽しみつつ
メディウサはホーネットの
クレーターのようになった
女性器にビンごと手を突っ込み、
中で握り砕いた。

たちまちに変化は起きた。
伸びきっていた腹の皮も、破壊された内臓も、
拡張された陰唇も、
何日かかけての再生を待つ事なく、
全てが凌辱される前の状態へと復元されていた。
「え……これは……」
「これでよし。以前との最大の違いは、
まあ使ってみればわかるか。
ケーちゃん！」
手足を拘束しているケイブリスが、
のっそりと一番太い触手を
もたげる。犯すためにだ。
「ガハハ、ホーネットお……
とうとうお前もトドメを刺される時が
やってきたってワケだ。俺の子を
孕まされるなんて光栄だろう？」
「い、嫌……そんな……」

「うぅ……」
「その表情いいな……初めて犯したときよりばっきり怯えてやがる。」
「いまガッツリ膣内射精して、孕ませてやるからな、ホーネット！」
「あ……」
膣口を割り開いて、ケイブリスの触手が中へと侵入を開始する。犯すためではない、孕ませるために。


「あはぁぁっ……!!」
「うぉぉ……最高にいい具合だぜ、前よりずっとこなれてて、なのにぴちぴちのぎちぎちだぁっ！」
「それにお前が心底怖がってるってのが最高に気分がいいぜぇっ！」
激しくホーネットを犯し始めるケイブリス。
その触手はいつにないほど太く、ガチガチに勃起している。

初めての恐怖がホーネットを襲う。
その取り乱した姿に初めてケイブリスに犯されたときの毅然とした高貴さはない。
「中、中はいやぁ……出さないでぇ…」
「駄目だ、お前は俺様の子を孕むんだよっ!!」
「中に出さないで、中に出さないでぇ!!」
童女のようにイヤイヤと首を振りながら懇願するホーネットの哀れな姿に、その場の全員が欲情する。

「おらぁぁぁ!!孕め、孕めぇぇぇっ!!!
魔人筆頭に種付けだぁぁっ!!!」
「あぁぁぁぁぁっ!!」
ホーネットの膣に
ケイブリスの精液が注がれる。
今まで何百リットルも受け入れてきた粘液も、
この怪物と自分の間に子供ができるとなると、
嫌悪感は例えようもなく大きくなっていた。
弱った精神が耐えられるはずもなく、
あられもなく泣き叫ぶ。

いつものように子宮内までもを押し広げ、
中に精液を溜め込み始めるケイブリスの触手。
だが、魔力の流れに敏感なホーネットは
今までとの違いをはっきりと感じ取った。
僅かだが……自分の胎内に、
強く新しい魔力の存在を感じる。
これは……まさか……
涙が滲んでくるのを止めることができない。
……妊娠、させられた。

「ふっ、ふうっ……」
ペニスが引き抜かれてからほんの数分。
荒い息をつきながらホーネットは疑問を感じる。
精液はあらかた逆流して腹は小さくなるはずだが、
いっこうにもとのスタイルに戻る様子がない。
「うふふ、さすがベゼルアイの血の効果だけあって、
すごい繁殖力ね。」
「……繁……殖……？」
「アンタの腹のなかでもう
ケーちゃんの子が育ってるのよ、
豊富な魔力を吸収して普通の何百倍も早くね」
「そんな……」
「ご懐妊おめでとう、
ホーネット、すぐ産まれるわ」
「そ、そんな、いやだ、やだぁぁっ……」

「ひ、ひぃぃっ……!!」
２０分もせずにホーネットの腹は
ふた回りも大きくなり、
とうとう破水した。
思考が全く追いつかない。
憎むべき仇敵の子を妊娠させられたと思ったら、
こんなに大勢の前でそれをひりださなければいけないのだ。
どれだけ抵抗しても、陣痛はひどくなるばかりで、
いきまずにはいられなかった。
「い、いやぁぁ……産まれちゃうぅぅっ……!!」
観衆は女として最大の辱めであろう
強制公開出産をさせられるホーネットに
異様な興奮をしている。
いつしか誰からともなく「産めコール」が始まっていた。

「ぐひいいいっ！」
ずるり、と音を立てて、
緑色の毛が生えた奇妙な生物が、
ホーネットの股間からひり出された。
拍手とともに湧く大観衆。
ホーネットママ、経産婦魔人、使用済みマ○コなど、
言いたい放題の雑言が浴びせられる。
ホーネットは朦朧とした意識で乳房に違和感を感じた。
両胸に目をやった彼女は、
ケイブリスの触手にもみしだかれた
両の乳房から母乳が出ているのを見ると、
ショックのあまりに失神した。

この日から、ホーネットにとっては更なる受難の日々が始まった。
あの魔人筆頭に、自分の子を産ませられる。
最高の肉便器が、孕み奴隷へとランクアップしたのだ。

ホーネットへの凌辱はさらに苛烈をきわめ、
ありとあらゆる異形を孕み、産むことになった。

メディウサは粘液まみれの緑色のモフモフを
アレフガルドに綺麗にさせていたが、
あらわになったその仔の可愛らしすぎる顔に
大笑いしていた。
小動物のぬいぐるみのようで、
貫禄や凶暴さなど１ミリグラムも
存在しない。

「なにこれ超かわいい!!
アンタの子供のころってこんなんだったっけ？」
「うるせえ!!」
「大事に育ててやんなよ、
あの女はイケ好かないけど
かわいいじゃんそれ」
「まあ、毛の色があいつと同じってのは
気にくわねえけどな……」

人類軍が反撃を開始し、
魔軍は予想外に苦戦している。
慰安所のあった地域も閉鎖され、
ホーネットは魔物将軍にペットとして
飼われていた。
首輪をつけられ牢につながれ、
魔獣とのセックスを将軍に見せるのが
仕事だ。

この日は下等なわんわんが相手だった。
ホーネットの膣に的確にペニスを沈め、
必死に腰を振る。
魔物ですらない下等生物による交尾。
精神が荒廃しつつある孕み奴隷も
流石に嫌がったが、
拒否できるわけもない。

わんわんの交尾が激しさを増し、
ホーネットも感じずにはいられない。
「く、くぅ……っ」
歯を食いしばって耐えるが、
ホーネットのことなどお構いなしに
わんわんのペニスが快楽を
絶え間なしに送り込んでくる。
「わんわんとセックスなんて……っ
嫌ぁっ……！」

どびゅっ、どぷんっ……!!
「あぁぁっ……」
ホーネットの膣内に、
わんわんの熱い精液がぶち込まれた。
「また……妊娠……しちゃう……」

「う、産まれ……る……」
破水するホーネット。
魔人筆頭が
下等生物の「仔」を産まされる。
無敵結界のために
本来魔人には絶対に勝てない
魔物将軍からすると、
何度見ても胸がすく光景だ。

（生まれた……）
ずるり、とかわいらしいわんわんの仔が出てきた。
ホーネットは赤面しながら、いきみを継続する。
まだ何匹もお腹にいるのをはっきりと感じている。

三頭が元気に生まれ、
必死に母乳を求めている。
髪の毛の色は自分と同じだが、
全体的デザインは父親似だ。
下等でくだらない生物とバカにしていたが、
改めて見ると可愛らしい。

「……たくさん飲みなさい、
赤ちゃん」

ホーネットは優しい笑顔を
仔たちに向けて、
飲みやすいように
体を動かしてやった。

受け入れるしかないし、
そうしてしまえば
そこまで悪くはなかった。

魔人としての
全てを失ったとしても、
すぐに引き離されてしまうとはいえ、
今の自分には子供達がいるのだから。

孕み奴隷と成り果てたとしても、
限られた間とは言え
母の喜びだけと
赤ん坊の可愛さだけは存在する。

それは彼女がケイブリスに捕らえられてから
得ることのできた、唯一の安らぎだった。

やがてホーネットは人類軍によって
救出される事となる。

あまりに落ちぶれた姿に
仲間の女魔人達は皆ショックを受けたが、

かつてのどこか張り詰めた
鋭い高貴さこそないものの、
深い優しさと慈愛を手に入れた彼女に、
より強い忠誠と敬意を抱くこととなった。